（様式１－２）

Ⅰ　学校の概要

学力向上モデル校事業　**高松市立円座小学校**

◆児童及び教員数

○児童数

第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	特別支援	全　校
３学級 １００名	４学級 １１８名	３学級 １００名	４学級 １４１名	４学級 １０７名	４学級 １３０名	６学級 ３３名	２８学級 ７２９名

○教員数　　４０名

◆学校の特色

本校の児童は、素直で明るく、学習に落ち着いて取り組んでいる。一方で、課題解決のために主体的に取り組むことや、他者の意見を自分の考えと関連付けたり、新たに考えを生み出したりすることに課題がある児童もいる。

今年度の香小研統一研究会の算数部会での実践発表をめざして、令和４年度から３年間算数科の授業研究をしている。昨年度末に児童に行ったアンケートの結果から、友達と話し合ってよかったと実感している児童は全校の約９３％にものぼった。一方で、一部の児童だけで問いづくりが進められる場面があることや内容の本質に迫る全体交流の場面で、教師対児童の対話のみになりがちだという課題が挙がった。

Ⅱ　研究主題等

研究主題

問いの解決に向けて、共に考えを創り上げていく子どもの育成
～悩み、ひらめき、つながる、学びを楽しむ授業つくり～

◆研究主題設定の理由

問いを自分事として捉え、その問いの解決に向けて主体的に取り組む姿や、協働して考えや価値を創り上げる姿をめざし、令和４年度に本研究主題を設定した。さらに、その原動力となるのは学ぶ楽しさであると捉え、学ぶ楽しさを実感できる授業つくりをめざした。

昨年度の実践から、教材の工夫や出合わせ方を教師が意識することで、児童のつぶやきや反応から児童が「解きたい」「やってみたい」と思う問いづくりをすることができた。また、自分たちで作った問いの解決を追究するために、自ら対話をしていこうとする児童の主体的な姿を見ることができた。

そこで、本年度も学ぶ楽しさについて追究していく。学習する楽しさとは何か。課題に出合い、問いをもち、解決に向けて頭を「悩ませ」、友達と対話をすることで「ひらめき」、自分の問いや次の学習、生活へ「つながる」授業をめざす。その過程こそが「学びを楽しむ」ことであることを児童に実感させたい。

この研究を進め、困難な課題でも他者と協働しながら、考えを練り合って創り上げ、自分の置かれた環境をよりよくしていこうと主体的に働きかける児童を育みたい。

◆研究内容及び方法

（１）子どもの問いを生かす授業つくり

児童が主体的、協働的に取り組むためには、そこには「考えたい」「解決したい」と思う問いをもつ必要がある。昨年度から進めてきた学級の問いつくりとともに、個の問いを生かす授業つくりをめざす。

【主張点Ⅰ】子どもの問いを生かす授業つくり

自分たちで考え、話し合い、解決に向かっていく授業にするには、問いの設定が特に重要である。子どもたちの素直で多様な反応やつぶやきが表出するよう、教材の工夫や出合わせ方を考えていく。 １時間の授業内や単元に、子どもの問いを組み込むことで、学びの深まりや主体的に問いを追究する姿をねらいたい。

① 課題に対する子どもたちの反応やつぶやき、感じた疑問から、学級の問いを全員でつくる。さらに、授業内で生まれた問いを児童一人ひとりがノートに残すようにし、個の問いを授業や単元に生かす。
② 子どもと共に問いをつくることを普段の授業から行い、習慣化する。そうすることで、学習に対して主体的に考える姿勢を育む。

【主張点Ⅱ】ねらいに迫るための自己選択の場つくり

教師が「教える」授業から児童が自立的に「学ぶ」ことをめざしたい。「一人で黙々と学ぶ」児童や「友達と相談しながら学ぶ」など、自分にとって最適な学びを自らの判断で計画・実行できるように単元計画を工夫していく。そして、自ら学ぶことができるような手立てを教師が準備する。 学年に応じ、単元を通して自己選択ができる場を設けるとともに、ICT を積極的に活用して、個の学びを協働的な学習に生かしていく。

① 児童一人ひとりが友達の考えを聞きたい、自分の思いを伝えたいと思えるようにするために、個別最適な学びの時間を十分に保障する単元の工夫。
② 自ら立てた問いや学級の問いを解決する過程において、自分の考えをもつことができるよう、指導の個別化がはかれるような手立てを準備する。
③ 問いに対する自分の予想や考えをもって対話を行うことや問いの解決方法、発展的な学習を児童に
選択させることで、個を生かす協働的な学びの実現。
④ ねらいにせまる場面で、児童の言葉でつなぐ対話が活発になるよう、安心して発言したり、共感的に受け止めたりできる人間関係や環境つくり。

（2）学びを捉え、つなぐ振り返り

昨年度、学び（何を学んだか）と振り返り（どのように学んだか）の一体化に取り組んだことで、学習内容を整理しながらまとめ、自分の変容を認識したり新たな課題を自ら見つけたりする児童が増えた。前単元の内容や生活場面とつなげながら振り返る児童も増え、振り返りを行う意味や目的を見出せていない児童も少なくなった。そこで、今年度は昨年度の実践に加え、児童一人ひとりが感じた「学ぶ楽しさ」を言語化することで、「楽しく学べた」ことを自覚し、更なる学ぶ意欲につなぐ振り返りにしたい。

この楽しさとは、単に活動が楽しいという意味だけではなく、問題を解決したときの達成感や挑戦することへの期待など、多くのものが存在する。以下は本校が考える、学ぶ楽しさである。

・解をつくっていく楽しさ	・できる喜びや達成感	・挑戦することへの意欲
・学んだことを生かす楽しさ（単元、他教科、生活など）		・実生活とのつながり
・認識のずれや新たな発見	・考えの広がりや深まり	・自分の成長の実感

これら以外にも、学ぶ楽しさについて広く捉えるようにする。教師は、授業や単元を通して児童が実感できた楽しさについて振り返りから見取ることで、授業改善へとつなげていきたい。

① 多様な見方や考え方に触れさせたり、学ぶ楽しさについて児童と一緒に考えたりするための振り返り活動にする。
② 振り返りの視点を示したり、単元を通して積み重ねが分かるようなシートを用意したりして、学びの変容や自分の成長について考えられるようにする。
③ 教師が新たな視点を投げかけたり、学習内容が生活で生かされている場面などを紹介したりして、次の課題や新たな問い、実生活につなぐ工夫を行う。

Ⅲ　成果の評価計画（検証方法）

・　４月末に、問いづくりや協動的な学び合いについての教員アンケートを行い、目標値を設定する。１１月末に同じ項目のアンケートを実施し、変容や達成状況を見取る。
・　４月末に、問いづくりや協動的な学び合いについての児童アンケートを行い、目標値を設定する。４月末のアンケートをもとに、実践を行い１１月末に同じ項目のアンケートを実施し、変容や達成状況を見取る。
・　全国学力・学習状況調査、県学習状況調査などによる学力分析
・　学習準備の様子や家庭学習の内容、児童の意識を調査し、実態を把握する。
・　児童のノートや学習記録など、表現物の質的変化を見る。
・　児童アンケートによる個や集団の評価
・　保護者アンケートや学校関係者による評価

Ⅳ　研究成果の普及方法

・香小研統一研究会で学年１本の公開授業【１０月３１日（木）】
・香川の教育づくり発表会で実践内容と成果や課題を発表する。【１２月２６日（木）】
・現職教育で算数以外の教科での実践事例交流会をする。【３学期】
・ホームページや学年だよりで実践内容を紹介する。